

Cutting Through Time



Cressida Campbell, Margaret Preston,
and the Japanese Print

日本語

時を超えて刻む ―クレシダ・キャンベル、マーガレット・プレストン、そして日本画

当展示会は、オーストラリアの著名な現代画家・版画家であるクレシダ・キャンベルと、革新的なモダニズムの画家・版画家であるマーガレット・プレストンに、浮世絵（日本の木版画）が与えた影響について探ります。

プレストン氏は、20世紀初旬の最も著名な実験的な版画家です。当時、西洋の芸術家の多くがそうであったように、彼女の絵画や版画も、日本の浮世絵木版画の伝統および美学に多大なる影響を受けていました。同様に、キャンベル氏の見事な絵画や版画からも、浮世絵の色彩・絵柄・構図に対する強い興味が明らかで、絵具を塗った版木や木版画には、自身が個人的に大切にしていた日本の浮世絵コレクションの作品の表現が見られるほどです。

当展示会では、キャンベル氏とプレストン氏の絵画は別々のギャラリーでご紹介しており、日本で最も影響力を持つ歴史的なアーティストの浮世絵が展示される中央スペースの側面にそれぞれ設置されています。そのような展示の配置によって、キャンベル氏とプレストン氏の全く異なった創造的行為に対する歴史的な日本の木版画の重要性が明らかになるだけでなく、文字通り時を超えて、浮世絵の技術や構成をそれぞれがどのように採用し変化させてきたかを垣間見ることができます。浮世絵木版画の豊かさ、魅力的な美しさ、そして多様性は、プレストン氏とキャンベル氏の作品を形作る数々の芸術的影響と文化的背景の一部となっています。

本展示会では数世紀にわたる芸術作品をご覧いただき、歴史を振り返りながら、文化的・社会的に特徴的な芸術行為の関係性について、創造力を働かせてじっくりと評価する機会を提供します。それらの作品が提案する示唆に富んだ新しい解釈の枠組みによって、歴史的そして現代的な芸術作品が、素晴らしく複雑な連続体であると考えられるでしょう。

クレシダ・キャンベル

クレシダ・キャンベルは、幼少期に葛飾北斎や歌川広重の作品に触れ、日本の版画に興味を抱くようになりました。1970年代後半、美術学生一年目の時に、「日本の方式」で、色別に一枚ずつ木版を使用して木版画を作成しました。

1985年にキャンベル氏は、東京の吉田版画アカデミーで版画制作のワークショップを受講しました。そこで学んだことから、伝統的な日本の彫り方に少し変化を加えた独自の手法を早速開発しました。キャンベル氏は一枚の木版を彫り、それに水彩色を塗り重ね、その木版によって一度に摺り上げます。その唯一無二の木版画と絵具を塗った版木の両方が展示されており、それらは同等の重みを持つものです。

この空間の作品は40年にも及び、キャンベル氏が日本の浮世絵版画制作の構成や技術的側面を取り入れた初期の作品には、生活環境、シドニー都心部やシドニーハーバーの景色、木のある景観や自然の植物相を間近に観察したもの、静物を配置した情景、円形の絵画であるトンドなどがあり、そこからキャンベル氏の物質的かつ芸術的に多様性にある自宅のインテリアをご覧頂けます。

キャンベル氏の浮世絵の個人コレクションは、喜多川歌麿・歌川国貞・葛飾北斎・歌川広重などによる素晴らしい作品を含みます。次の部屋では、彼女の構図で複製されたそれらの貴重な歴史的浮世絵をご鑑賞いただけます。

またキャンベル氏は、マーガレット・プレストンが自身のモチーフに与えた影響について考えました。1980年には「The Art of Margaret Preston」（ニューサウスウェールズ州のアートギャラリーにて開催）の展示会を訪れました。それから長い年月を経て、プレストン氏のものを含めたそれらの展示会を思い起こし、彼女はこう言いました。

「素晴らしい色彩の木版は、その当時、新しい発見でした。それは私に刺激を与え、身近な存在であった日本の浮世絵と同様に、初期の私の木版画に影響を与えたことは間違いありません。彼女の絵画に描かれるオーストラリアの自生植物は、私も大好きだったので、それらがドラマチックに描写された様子には興奮を覚えました。」

[クレシダ・キャンベル、オーストラリア国立美術館（キャンベラ）、2022年]

日本画

浮世絵とは、浮世の絵画を意味します。

本来、浮世とは、存在の一過性や儚さを意味する言葉でした。江戸時代（1603-1868年）には別の意味合いを持ち、その瞬間を生きるという広く行き渡った考え方を指して使用されました。「浮世」とは、遊女の営みや人気の歌舞伎劇場を含む都市の娯楽地区での生活を指しました。また「浮世」は、現代的で、裕福で、あか抜けて、お洒落であることも示唆しました。表向きには社会的に見放されていたものの、これらの絵画に登場する遊女や歌舞伎役者は、その美貌や華麗な服装が高く評価され、社会の流行を作り出していました。

そのファッションやスタイル確立への多大な影響力は、17世紀の終わりまでに日本で繁栄していた出版業界が最大の要因でした。新しく出現した印刷媒体（一般社会に広く浸透）では、浮世の華やかなエンターテイナーが最も人気を博した題材として取り上げられていました。

この空間には当時の最も素晴らしいアーティストたちが代表として展示されています。是非ご注目頂きたいのは、それらの作品は数世紀にわたるもので、一つの絵画様式としての浮世絵が時間と共に進化した様子が反映されている点です。全体的にそれらは、家屋の内装（絵画の中の絵画）、静物、風景、歌舞伎役者の肖像画や人体デッサン、遊女、そして侍など、浮世絵版画の主なテーマや人気の構図を映し出しています。それらの主要な浮世絵アーティストはマーガレット・プレストンが所有する多くの出版物に特集され、クレシダ・キャンベルもそれらの作品を収集しています。

歴史的な浮世絵版画は、儚さや一過性を重視してはいるにも関わらず、人々の心を動かし続けます。当展示会の作品からは、数世紀にわたる美術作品の豊かな対話や、キャンベル氏やプレストン氏などのアーティストが、幅広く文化的・技術的・構成的・美学的な面で参考とした部分がお分かりいただけるでしょう。

マーガレット・プレストン

マーガレット・プレストンは1934年に日本で版画制作を学びましたが、彼女の日本画への興味は1900年代初期にまで遡ります。1904年から1906年まで海外旅行中に、プレストン氏は日本の美学やオリエンタリズムが、ビンセント・バン・ゴッホ、ジェームズ・マクニール・ホイッスラー、オディロン・ルドン、アンリ・マティスなどの西洋の画家の作品に与えた影響を目の当たりにしました。1912年からの2回目のヨーロッパ旅行中に、プレストン氏はパリのギメ東洋美術館で日本の浮世絵について学びました。

プレストン氏は1913年後半にロンドンを訪れましたが、彼女の興味を考えると、多大な影響力を持つ展示会であったヴィクトリア&アルバート美術館の「Japanese Colour Print」を訪れた可能性があります。また、プレストン氏は日本の版画制作に関する重要な出版物を収集し始め、彼女の個人的なコレクションの一部がこの場に展示されています。

プレストン氏は1920年にオーストラリアに帰国し、その後まもなく完成した版画は、自身が学んだ浮世絵作品の構図や技術要素の影響を受けています。それ以降の作品に関して、彼女は「シドニーの都市環境を日本のふるいにかけている」と表現されました。1938年には彼女は、「もしデザインについて何か知りたいのなら、アートに対する愛は日本の木版画を学ぶことで満たされる。日本の木版画は対称的な構図で知られるが、決して『隙間』があるわけではない」と考えを述べました。

木版印刷はプレストン氏が好んだ製版技術ですが、本展示会で見られるように、1940年代後半から1950年代前半まで使用されたメゾナイトやカラーステンシルから、長年にわたり実験的な姿勢で取り組む彼女の様子がうかがえます。プレストン氏は、木版画が非常に民主主義かつ平和主義な表現手段だと考え、1930年の『Art in Australia 誌』に次のように記しました。

「材料の面では、木版画は最も容易な美術工芸品の一つです。一片の木材、ナイフ、インク、紙など、誰もが入手できるものばかりです。それは、ホッとできるような、親しみやすい美術工芸です。」

プレストン氏の木版画に丹念に描出されたデザインは、エネルギーと力強さで生き生きしています。彼女の木版画制作に対するくつろいだ姿勢は、日本の浮世絵版画の彫師や版画家が受けた、精密な技術や優美な芸術を極めるための長年にわたる修業や特訓とは、大いに対照的なものです。